京都の跡取りは誰？

ユースACTプログラム

2010年度 報告書

ユースACTプログラム実行委員会

ユース ACT プログラム活動報告会参加者の声

活動を通して「自分の思いを大切にしつつ，相手のことも考えて行動することが大切」であることを学び、「人前で自分の意見が言えるようになった」と自身の成長を発見し、「また同じ仲間と活動に参加したい」と今後の目標を語る高校生の姿に頼もしさを感じました。

今後もこの活動を受け継いでいってほしいと強く思いました。

（京都市教育委員会　正木廣樹さん）

就職活動をしていると「社会で果たす役割」を必ず求められる。報告会に参加して最も驚いたのは高校生が主体となり、各々でそのような価値を見出だして活動していることでした。大変意義ある活動だと思います。

（京都産業大学　村上拓也さん）

高校生の自信たっぷりに楽しんでいる表情や、報告会を「しないといけないからしてる」んじゃなくって「自分の言葉でしっかりと答えている」姿がとても印象的でした。

高校生が大学生を信頼し、チームとして頑張ってきたことがとても伝わってきました。

（滋賀大学大学院 教育学研究科　井出大地さん）

高校生が自分の気づきを行動につなげ、その気づきを忘れずにいること。このプログラムの報告会をみていると、その瞬間の大事さに気づきます。出会った仲間と気づきを確かめ合いながら、成長を続けて欲しいなと願います。

（滋賀大学大学院 教育学研究科　城木信浩さん）

高校生対象・長期実践型シティズンシップ教育事業

ユース ACT プログラム

現在、京都地域でどの程度の高校生がまちづくり活動に参加しているでしょうか。教室の中での地域学習やまち歩きを通じた地域理解の取り組みはあっても、街の中でまちづくりの実践活動に取り組んでいる事例は少ないでしょう。若者が社会づくりの担い手として育っていくためには、知識や技能の習得のみではなく、行動する態度の形成や、状況や場面によって知識や技能を使いこなす応用力が必要です。そうしたものの形成には「現場」での実践体験活動が不可欠です。

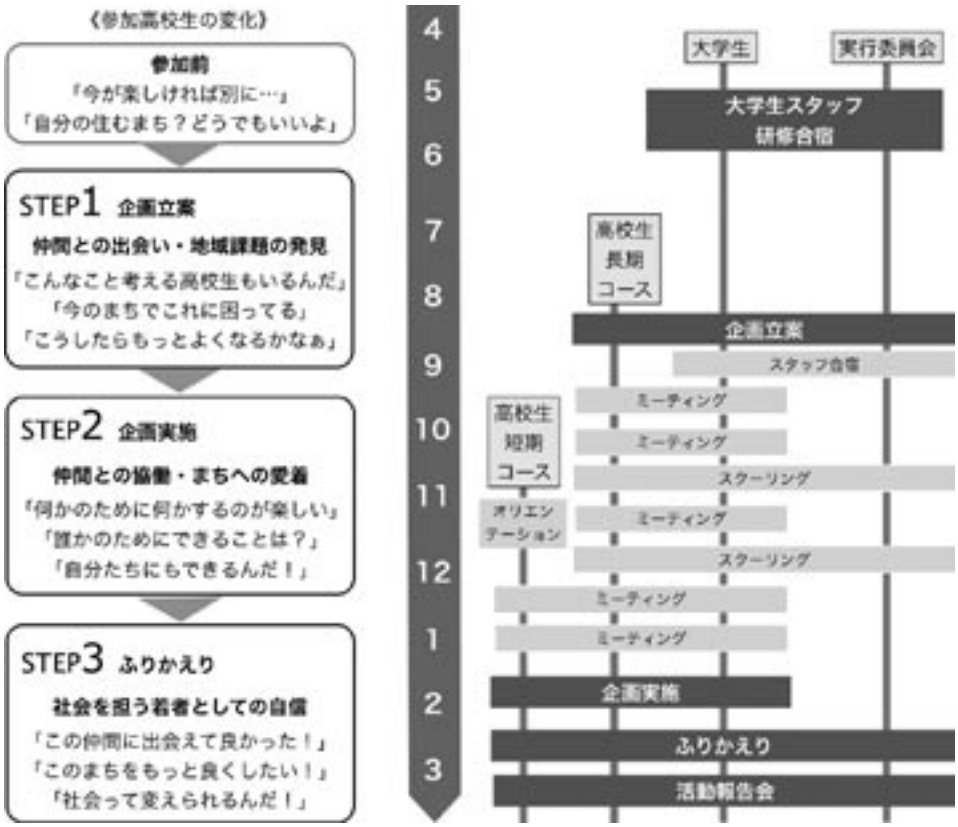
そこで、学校外の現場でのボランティア学習やサービスラーニングへの注目が高まっています。しかし、大学生対象プログラムの充実度と比較して、高校生対象プログラムは皆無に等しい現状です。高校時代に、若者は「こども」から「おとな」への本格的な移行をスタートさせ、人格形成を大きく進めます。この人格形成のタイミングを、「まちの跡取り」としての自覚と自信を育むことを目的に、ユース ACT（Active Citizenship Training）プログラムは実施されています。

具体的には、高校生が学校を超えて集った仲間たちと一緒に「まち」と向き合いながら、各自の社会への問題意識を育み、まちを良くするための具体的な企画を立案します。そして、その企画を実施し、最後は自己評価と社会発信（活動報告）まで取り組みます。PDS（Plan-Do-See）サイクルに一貫して取り組むことで，多様な状況への対応力が高まり、また実践的な行動力が身に付きます。

また、高校生をサポートする大学生についても、高校生の企画を支えながら、プログラム本体の企画運営も行い、社会の担い手を育てる営みに目を向けることにつながっています。

スケジュール

2010 年度のユース ACT プログラムは、「長期実践コース」と「短期集中コース」の 2 つのコースを用意しました。「長期実践コース」は 9 月に高校生自身が一から企画立案に取り組み、実施からふりかえりまでを半年間かけておこなうものです。一方、「短期集中コース」は大学生が立案した企画に高校生が 12 月からスタッフとして参加、3 ヶ月間で大学生と一緒に企画の詳細を検討し、運営していくものです。



目 次

ユース ACT プログラムとは？　2

短期集中コース　4
　「ともいきキャンプ」　5
　「スクール・オブ・チェンジ」　9
長期実践コース　10
　「マツプ・デラックス」　11
ふりかえり　14
活動報告会　15
参加高校生の感想　16
スタッフの感想　19

実施体制　21
参加者アンケート結果　22
次年度の展望　24
収支　25
マスコミ掲載　26
広報資料　27

短期集中コース

実施背景

6ヶ月の長期実践コースのみを実践してきた08年度／09年度の実践経験を踏まえ、次のような背景から本コースを設置することとなりました。

（1）3ヶ月の比較的短期間かつ大学生との協働プログラムならば、高校生がより参加しやすいこと

6ヶ月間かけて高校生だけで企画を一からつくり上げることに対して、内外から参加のハードルの高さを指摘されていました。

（2）進路決定後の生徒を対象とする学習プログラムの少なさ

学校教員の方へのヒアリングの結果、進路の決定した生徒の自由な時間は「遊び・バイト」に消費され、先生からは受験指導で面倒を見切れないという声がありました。

概要

京都地域の大学に通う大学生が（地域）社会課題を解決するためのプログラムを3つ立案し、京都地域に在住・通学の高校生がそのいずれかを選択し、企画スタッフとして参加するものです。高校生は大学生と協働しながら、その企画内容の詳細検討および実施に関わり、大学生は高校生の主体性が発揮され、彼ら／彼女らの意見等が活かされるようにファシリテーターとして関わります。

3つのプログラム

（1）「ともいきキャンプ」

「多文化共生・異文化交流」がテーマのキャンプを実施します。

（2）「スクール・オブ・チェンジ～こうして僕らは社会を変えるための一歩を踏み出した～」

社会課題を解決するために活動するNPO/NGOスタッフから話を聞き、関心の高い団体へ一ヶ月の間（うち7日間程度）ボランティアとして参加します。

（3）「寺子屋@ Kyoto」

「組ひも」や「竹楽器」などのものづくりを地域の人たちに教わりながら、そこでの学びを活かした小学生向けの体験プログラムを高校生たちで準備し、実施します。

スケジュール

（1）大学生による複数の企画立案

大学生が企画を立案し枠組みを詰めつつ、参加高校生を集めるための広報にも取り組みます。

（2）説明会

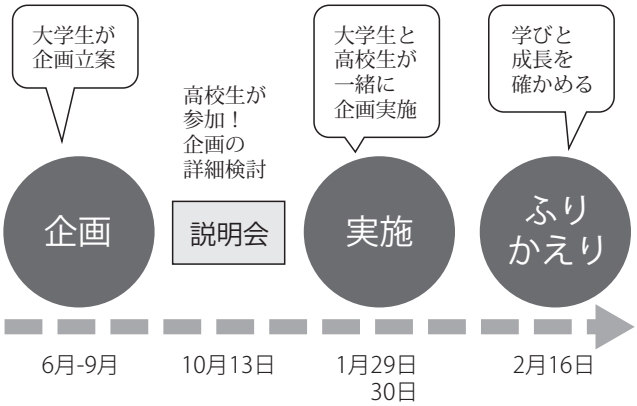
3つのプログラムの概要説明を行い、高校生が関心のあるプログラムを選ぶための機会として実施。この後、高校生は参加したいプログラムに申込み、各々がオリエンテーションやプレプログラムに参加します。

（3）企画の準備・実践

高校生が大学生と一緒に企画準備に取りかかり、実践します。

（4）ふりかえり

プログラムに参加する中で得た学びや気づき、成長を確認し、グループで分かち合います。



ともいきキャンプ

概要

目的

高校生が外国人（留学生・就学生・在日外国人など）の同世代の若者たちと、国籍の違いに根ざした先入観を乗り越え、文化の多様性に気づくこと。さらに、お互いを尊重し、その多様性をエネルギーとして活かしあうことで、自分たちのくらしや生き方がより豊かになっていく関係を育みあうことを目指すプログラムです。

コンセプト

「ともに活きる 生き方に出会う」

内容

大学生が考案した「ともに活きる 生き方に出会う」というコンセプトをもとに、高校生と留学生、大学生が協働して京都に住む外国人と日本人の若者たちの異文化交流を図る企画を実施する。主に、参加者同士の関係づくりを行う 1 日目は主に高校生が、文化の違いについて深く考察する 2 日目は大学生が主に担い、ともにプログラム準備と運営にあたった。

参加者

今西優貴さん（ゆう）　京都外大西高等学校 3 年
浦上由紀さん（きーちゃん）　京都外大西高等学校 3 年

キャンプ実施日時

2011 年 1 月 29 日（土）13:00 ～ 1 月 30 日（日）12:00

キャンプ実施場所

京都宇多野ユースホステル、専修寺 京都別院

キャンプ参加人数

14 人

ともいきキャンプ
ミーティング

12 月 22 日（水）「ともいきキャンプ」スタート！　オリエンテーション

プログラム参加者の２人と、大学生スタッフが初めて顔を合わせ、お互いの「参加への思いと期待」について語り合いました。また、スタッフから「ともいきキャンプ」のコンセプト「ともに活きる　生き方に出会う」の説明がされ、大学生がキャンプ当日の 2 日目のアクティビティを、高校生が 1 日目の最初のアクティビティを中心に考える、という役割分担を確認しました。

1 月 5 日（水）高校生だけのミーティング

キャンプ当日のアイスブレイクの意味も含めた最初のアクティビティの内容を、ゆう（今西優貴さん）ときーちゃん（浦上由紀さん）の２人だけで考えてもらいました。ハンカチ落としや大縄跳びなどの懐かしい遊びがたくさん挙げられましたが、その中でも、みんなのことを知ることができるように工夫した「なんでもバスケット」をすることに決定しました。

1 月 11 日（火）初フィールドワーク

キャンプ当日に宿泊する京都宇多野ユースホステルを下見しました。施設周辺のお寺や、観月の池として知られる広沢池なども一通り見て回ってから、当日、参加者にアナウンスすべき内容や土地を活かしたアイデアを出し合う中で、スタッフとしての自覚が出てきたり、どのようにキャンプ当日の行程が行われていくかといったイメージが膨らんでいくような時間が持てました。

1 月 14 日（金）意見が合わず初めての対立

外国籍の参加者に日本語が通じない懸念もある中「なんでもバスケット」をどう説明するのか？」ということを話し合いました。ゆうが説明方法の案を準備してくれていたのですが、「絵を使った方がいい」、「日本語が固い…」などの意見があり、仲良しな 2 人組が初めて対立した場面でした。この次の日、2 人は初めてケンカをしましたが、「相手のことをもっとちゃんと考えなあかんなぁ」と後日語っており、とてもいい経験になったようです。

1 月 28 日（金）最終ミーティング

「ともいきキャンプ」を前日に控えた最後のミーティング。ここで、大学生スタッフのゆうい（湯浅雄偉）がインフルエンザにかかり欠席とのこと。二人は困惑した様子でした。しかし、時間もないので、いつになく真剣な表情で、「自分たちがしっかりしなきゃ」という意思が伝わってくる時間でした。次に「なんでもバスケット」のリハーサルをしたのですが、その結果「もっとわかりやすいようにしよう！」ということで、急遽説明用のフリップ作成にとりかかりました。より簡潔で明快な日本語を探す中で、参加者にとってのわかりやすさをしっかり意識するきっかけになったようです。

ともいきキャンプ

キャンプ当日

少しずつ打ち解ける「ウェルカム BBQ（バーベキュー）」

この日集まったのはスタッフを含む 14 人。外国籍の参加者は中国人留学生のティーちゃん（陳清さん）、カナダ在住ブラジル人のジルベルトさん（Gilberto De Melo さん）の 2 名でした。中国に留学中で、一時帰国しているスタッフのタニ（谷口優樹）も参加。最初の「ウェルカム BBQ」では、みんなで用具の準備や調理をする中ですっかり打ち解け、英語で話してみたりと積極的なコミュニケーションが行われました。終盤には、やきいもを高校生が回し食いをする場面があり、ティーちゃんが不思議そうに見ているなど文化の違いが垣間見える場面も。

ゲームで楽しんで、リラックス 「なんでもバスケット」

次はゆうときーちゃん担当の「なんでもバスケット」。案の定、日本の文化に馴染みのうすい外国籍の参加者の 2 人は「なんでもバスケット」を知らず、説明にはフリップを活用。緊張からか、早口になるゆうをきーちゃんが「速い！」となだめたり、いいコンビネーションを発揮しました。そのかいあってすぐにみんなルールを理解して開始。参加者の反応がよく、みんなで盛り上がる様子はしっかりと一体感を生んでいて、ゆうときーちゃんも満足したようでした。

「どうして日本人は…？」「シチュエーションゲーム」

続いて、ある状況設定に対して「こんなときどうする？」とみんなで考えてみる「シチュエーションゲーム」。「自分の買ったチューイングガムをみんなで分けるか？」などのお題について話し合いました。そんな中、ティーちゃんが「日本では食事が一人ずつ盛りつけられているのに、なんで同じやきいもをみんなで食べられるの？」という質問があり、その理由を掘り下げるとみんなの意見は多種多様。「おいしいよねっ！という気持ちを共有したい」という人もいれば、「日本人だけど、少し抵抗がある」という人もいて、「同じ国でも、それぞれに考え方が違うんだ」という気づきの声も出ました。キャンプの時間の中で起こった出来事を題材に、文化の違いについてじっくり考える時間になりました。

「明日はもっとこうしよう！」スタッフミーティング

1 日目のプログラムが全て終わった夜に、スタッフミーティングが持たれました。ゆうときーちゃんから「自分の仕事を忘れて参加者と喋ってしまっていたりして、スタッフとしての自覚が足りなかった」と反省の声。「明日はもっと参加者が楽しめるように頑張る」と決意を新たにしました。

「ともに活かし合うために」

2 日目は場所を専修寺京都別院に変えて、1 日目とは違った雰囲気の中でスタート。まずは 1 日目の気づきや感想をシェアした後、「私とちょっと違うな…と思う人と出会ったとき、どう行動した？」「それはなぜ？」そんな問いが進行役から投げかけられました。「今まで自分は、人を見た目だけで判断していて、『その人自身』を見ていなかった気がする…」といった気づきも聞こえてきて、日常の中で自分と他人との違いに出会ったとき、どうすればいいのか、それぞれの目標をみんなが持って帰れるような時間でした。

全行程を終了し、解散の挨拶ではゆうもきーちゃんも寂しそうだけれど、すごくいい顔をしていました。2 人から参加者にお礼の気持ちと、思い思いの言葉を堂々とお伝えし、ともいきキャンプは無事に終了しました。

ともいきキャンプ

参加者の声

山川恵梨香さん（奈良県立二階堂高等学校 2 年）

今回、ともいきキャンプに参加してみて、色んなことを考えることができました。皆でたくさん意見を交換しあってみて、「日本人は日本人」「外国人は外国人」と線を引いてしまうのはすごく良くないと思ったし、自分の行動を見なおして相手の立場になって考えることの大切さをあらためて感じました。

実際に色んな人と関わって真剣に考えてみると、思っていたよりも自分自身が偏ったイメージを持っていたり、決めつけてしまっている部分があることに気づきました。自分でも知らないうちに、壁を作ってしまっていたのかなぁと思います。

このキャンプで、「理解する」という言葉をたくさん聞きました。共に生きるには、お互いのことを理解することを諦めずに、尊重しあうことが大切なんじゃないかなぁと思います。どこの国の人だ、とかは二の次で…仲良くしたい、理解したいという気持ちが伝わると、きっと相手もそれに応えてくれるんだと思います。

ともいきキャンプで学んだことをしっかり生かしていきたいです。

ありがとうございました。

木津井優さん（奈良北高等学校 3 年）

ティーちゃん（陳清さん）とは行きのバスで仲良くなれて、日本語も日本のこともよく知っていたので会話もはずみました。日本のことを学ぼうとしている外国人に出会って、私も外国に行くにあたってたくさん勉強しないといけないなと思いました。また、相手の国のことや言葉など少しは知っておかないと会話が弾まないなと思いました。言葉の壁は大きいなと思いました。ジルベルトさん（Gilberto De Melo さん）とは最初なかなか会話が続かず、仲良くなれないのかな～と思ったりしたのですが、最終的にはたわいもない会話もできてよかったです。やっぱり「国」でその人を見て「その国の一人」といった偏見を持たずに個人を見つめることが大事だと思いました。

スクール・オブ・チェンジ

NPO の現場の声を
間近で聞ける 2 時間！

概要

目的　NPO/NGO の現場で働くスタッフの声を聞く中で、市民活動の現場に触れ、京都市内の地域・社会課題の現状への理解を深めること。また、社会変革に取り組むロールモデルと出会い、「自分も活動してみたい！」という気持ちを高めること。

内容　「今の社会をもっと良くしよう！」と活動している「国際協力」「環境」「子ども」の分野の課題解決に取り組んでいる 3 団体（NPO ／ NGO）のスタッフから、「どんな活動をしているの ?」「なぜ、どんな思いで活動してみるの ?」など、間近に話を聞ける 2 時間のプログラム。

なお、本企画の後に各団体で 1 ヶ月のインターンシップに取り組めるコースも用意していましたが、こちらへの参加希望者はありませんでした。

日時　2010 年 12 月 15 日（水）18:30 ～ 20:30

場所　龍谷大学 学友会館 404 号室

スピーカー
大下宗幸さん（NPO 法人地域環境デザイン研究所 ecotone）
栗田佳典さん（NPO 法人テラ・ルネッサンス）
村井琢哉さん（NPO 法人山科醍醐こどものひろば）

参加者数
7 名

まずは「今日、何を期待して来たか」などの情報を簡単に共有して自己紹介をすませた後、各団体から活動内容の説明。「何を目指しているのか」「何に取り組んでいるのか」それぞれの団体のコアな部分をじっくり聞きます。聞き手の高校生は真剣な様子。その後、「あの団体の活動おもしろそう…」と思うグループに移動します。

高校生が団体ごとに作られたグループに思い思いに分かれ、間近で話を聞くミニセッション。「そもそも、どんな思いで活動するようになったのか？」といったスピーカーの方のライフヒストリーなどに触れる話を聞いている高校生の表情は本当に生き生きとしていました。休憩のアナウンスをすると「あ、もう終わり？」そんな声も聞こえてきます。

最後に、全員で今日参加してみての感想と気付きを分かち合って終わりました。「今日初めて知った問題もあって新鮮だった」「またこういう機会があれば参加したい」という声も聞こえてきました。参加した高校生にとっては、それぞれのテーマから社会と向き合い、邁進する大人たちと出会う中で「多様な生き方」に触れる機会になったのではと思います。

長期実践コース

概要

京都市内の児童館や青少年活動センターに集える高校生などが、ワークショップを通じて（地域）社会に対する自己の問題意識に気づき、その気づきに立脚しながら（地域）社会の課題を解決する企画を立案します。その上でニーズや既存取組に関する調査等を行い、企画内容をブラッシュアップさせ、各活動施設を拠点にして実施に向けての取り組みを進めます。こうした高校生チームの企画立案および実施にあたっては、チームごとに大学生が各施設職員と連携しながら、実現に向けた支援を行います。

スケジュール

1）プレ企画

参加を検討している高校生が一歩踏み出して本プログラムに参加してもらうための機会です。ユース ACT プログラムの大学生が自らのライフヒストリーと「今」取り組んでいることを語ります。

2）高校生による企画立案

自分たちが普段生活していて「困るなぁ」「もっとよくしたいなぁ」という実感から、「まちをよくする企画」を組み立てます。

3）スクーリング

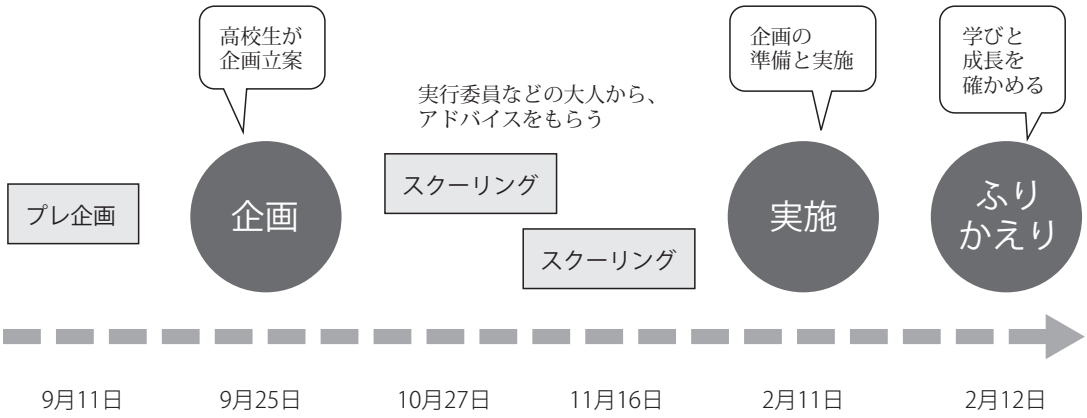
高校生が立案した企画をより洗練させるために、実行委員からの質疑応答や、アドバイスを受けます。

4）企画実施

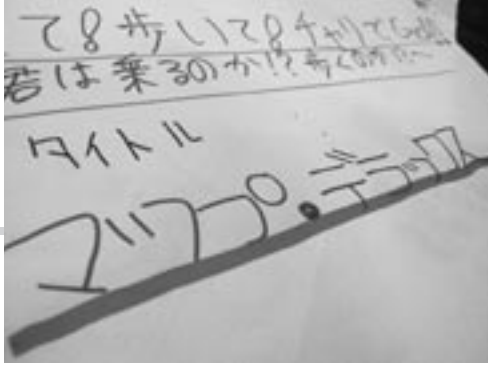
自分たちの立案した企画を実施します。

5）ふりかえり

プログラムに参加する中で得た学びや気づき、成長を確認し、グループで分かち合います。



マップデラックス



概要

目的

京都の繁華街・四条河原町周辺はとても放置駐輪が多く、まちの課題となっています。高校生にとっても「自転車が道にはみ出していて安全に通れない」「遊びに行っても自転車を停める場所がない」と感じることが多いため、この企画では特に中高生前後の世代を対象とするオリジナルの駐輪場マップを作成・配布することを通して、四条河原町付近の自転車利用者に駐輪場の利用を促し、違法駐輪を減らすことがねらいです。

内容

四条河原町付近および京都市伏見区の駅周辺にて放置駐輪の現状に関するフィールドワークを行いました。また、中高生前後の世代の若者に向けて駐輪場利用に関するアンケート調査を実施し、その結果に基づいてオリジナルの駐輪場マップを作成しました。マップには駐輪場の場所や料金や高校生のメッセージを盛り込み、既存の駐輪場マップよりもサイズを小さくするなどの工夫を凝らしました。
また、より多くの人に手に取ってもらえるようポケットティッシュに入れて配布しました。

コンセプト　「乗って！歩いて！チャリで GO ！」

対象　四条河原町周辺に来る中高生前後の世代の若者、自転車を利用する人

マップ配布数　約 1000 個

参加者

小倉裕貴さん (おぐ）京都府立京都八幡高等学校 2 年
丹羽光さん（ひかる）京都府立桃山高等学校 2 年
水田三咲さん（みさ）京都市日吉ヶ丘高等学校 2 年
元生旭さん（もっちゃん）京都市立日吉ヶ丘高等学校 2 年
山岸茜衣さん（あかね）　京都府立京都八幡高等学校 2 年
山領真広さん（まーくん）京都市立日吉ヶ丘高等学校 2 年

実施までの流れ

企画立案合宿

例年、1 泊 2 日の合宿形式で実施した企画立案ミーティング。今年は 3 回のミーティングに分けての実施です。

さて、1 回目は「○○（ひと・まち）にこうなってほしい！」という思いを洗い出すところからスタート。くらしの中で感じる「もっとこんなまちだったら…」という思いを出し合います。結果、「京都って自転車で走りにくいよね」「子ども・高齢者・障がい者にとって、もっと住みやすい街になってほしい！」という意見から、「自転車を利用する観光客のための道と、子ども、高齢者、障がい者のための安全な道が掲載してあるマップの制作と配布」という活動規模の大きな企画作りを進めるとこに決まりました。

前回、「6W3H シート※」への書き込みが最後まで終わらなかったため、2 回目に持ち越し。前回のふりかえりからスタートした後は、次回のミーティングに向けてアイデアを広げきっていく時間が持たれました。

3 回目は、これまでに出ていたアイデアを「6W3H シート」に整理し、「企画名」と「コンセプト」を決める日。お昼過ぎに始まった話し合いは長引き、暗くなるまで議論は続きました。納得いくネーミングにするためにとことん粘り、企画名は「マップ・デラックス」に決定。いくつものアイデアを出したからこそ生まれた名前です！

※「6W3H シート」：企画立案を行う際に必要な「Why, What, Where, Who, When, for Whom, How, How far, How much」の項目を整理するシート。

マップデラックス

実施までの流れ

10 月 9 日　はじめて、企画をおひろめ　企画発表会

うずらの里児童館の辻敏夫館長、ユース ACT プログラム実行委員を交えた企画発表会。「高校生である強みを活かせる工夫を！」などのメッセージが伝えられる中、「観光客」「生活者」の両方が対象に含まれていたため「対象をもう少し明確にしたほうがいい」とのアドバイスも受けました。

10 月 27 日　自分たちの思いを再確認　スクーリング（第 1 回）

数回のミーティングをはさんだこの日は、初めてのスクーリング。規模の大きいこの企画が実現できるのか…と不安を見せた高校生たちも、野池委員からの「この企画を立てた思いは？」との問いに答える中で「自転車が道にはみ出して危ない…」「四条に自転車を停める場所がない！」など自分たちの思いの原点を確認。街に出て、現状を調査しに行くことも決まりました。

11 月 3 日　活動の見直しを迫られる…。　フィールドワーク

京都のどこに、どのくらい違法駐輪があるか調べるため、彼ら・彼女らのよく利用する伏見区の駅周辺や、京都の繁華街・四条河原町付近でフィールドワークを行いました。調べる中で、駐輪場がない駅やコンビニ前に殺到している違法駐輪を目の当たりにし、自転車にかかわる課題をあらためて実感した様子でした。そんな中、市営駐輪場で既に行政が発行していた、京都市周辺をほぼ網羅した駐輪場マップを発見…。同じように駐輪場マップを作成しようと考えていた 6 人ですが、自分たちが何をすべきか見失ってしまうことに。

11 月 10 日　「高校生が使いやすいものにしよう！」ミーティング

駐輪場マップが既にあったことにショックを受け、ミーティングもなかなか気乗りしない様子。しかし、話をする中で「このマップ、大きすぎて見づらくない？」「違法駐輪をしている高校生たちが使いやすいものが必要」などの気づきや意見が出てきました。そこからは一気に高校生たちの豊かなアイデアが飛び交うミーティングへ。バーコードリーダーを使ったマップや、マップ配布のイベントを行うなどの意見が出ました。またこの頃、配布の対象を「中高生世代前後の若者」、扱うエリアを四条河原町周辺に決定しました。

11 月 16 日　さらなる調査が決定！スクーリング（第 2 回）

まずはフィールドワークの結果やその後の話し合いから出た、高校生を対象にしたマップのアイデアを説明しました。その後は実行委員を交えた意見交換です。やりとりを重ねるうちに「クーポン付きのマップなど、高校生がもらってプラスになるもののほうがいい」という新たなアイデアが高校生に浮かぶ場面も。また、赤澤委員から「困っているのは自分たち 6 人だけでなく、市内の高校生全体の問題だと明らかにしてみては？」と、高校生対象アンケート実施の提案を受けるなど新たな視点を多く得る時間でした。

そして後日、実行委員からもらった多くのアドバイスの中から、アンケート調査を実施することに決まりました。

マップデラックス

実施までの流れ

12 月 12 日　めざせ 100 人！　街頭アンケート調査（1 回目）

「どこに自転車を止めているのか？」「なぜ違法駐輪が多いのか？」を明らかとするためのアンケート調査の 1 回目を、主に高校生を対象に四条河原町付近で行いました。全員がアンケート調査は初めての経験で、最初は緊張してなかなか声をかけられない様子でしたが、最後の方はみんなが積極的に動けるようになっており、調査を真剣に行う様子が伺えました。後日聞いたところ、「苦手なことでも仲間とやるから頑張れた」とのこと。お見事！

12 月 14 日　「看板案」浮上　ミーティング

アンケート調査の結果、既存の駐輪マップの存在をほとんどの方が知らないという新事実が判明。「いっそ啓発のための看板を作っては」という意見と、「やはり使ってもらえるマップを作ろう」という意見に分かれました。意見がぶつかることが普段ない高校生たち、結局結論は出ず、次回に議論は持ち越されました。

12 月 21 日　高校生だけの話し合いへ　ミーティング

アンケートの 2 回目も終えたものの、「何に取り組むのか」なかなか方向性が定まりません…。そこで、一度アンケートの結果をふまえて年末年始で高校生だけのミーティングを持ち、年明けに発表することになりました。

1 月 13 日　ポケットティッシュ案に決定　ミーティング

この日は、年明けに高校生メンバーだけでミーティングした結果を、スタッフや実行委員に報告する日。6 人から出たアイデアは「ポケットティッシュに入れて配る」というもの。川中委員から「受け取ってもらえる、使ってもらえる工夫を考えないとね」との投げかけがあり、全員でしばらくアイデアを出し合いました。

1 月 22 日　午前中から、日が暮れるまで…　マップ作成

「表紙はあえて余白を多くしたほうが目に入るんちゃう？」「地図の目的は絶対必要やろ」…そんなやりとりをしながら具体的な部分を決めつつマップ作成開始。後日、数回のミーティングを経てマップがようやく完成！出たてのマップを、みんなで協力しながらポケットティッシュに詰める作業も進めました。

2 月 11 日　1000 個のマップが街ゆく人の手に　マップ配布

アンケート調査を経験したおかげで、みんなもあまり抵抗なく配布している様子。受け取っていただいた方に真剣に説明する様子や、自転車を押している方には絶対に配りに行く様子が特に印象的でした。最初は約 1000 個のマップを配りきれるのかと不安を募らせていましたが、終えた時はみんな達成感と笑顔に満ちていました。

「マップ・デラックス」は、京都青少年ゆめネットワーク（ゆめっと京都）の助成を受けて実施しました。

ふりかえり

短期集中コース

2011 年 2 月 16 日（水）13：00 ～ 16：30
キャンパスプラザ京都　学生 Place ＋

ゆう（今西優貴さん）・きーちゃん（浦上由紀さん）とのふり返りは、終始和気あいあいとした中で行なわれました。初めてケンカしたとき「謝ってくれたから、ほっとした」という話や、キャンプの準備から企画を通じての「自分の意見をちゃんと伝えるのって難しい」という気づきを、お互いに受け止めようと穏やかに耳を傾ける様子も見られました。「今回の企画を通じて、お互いの知らなかった部分や考えが見えました。今後はもっといろんな人と積極的に関わってみたいと思った」という 2 人の言葉が印象的でした。

長期実践コース

2011 年 2 月 12 日（土）10：00 ～ 12：00、14：30 ～ 17：00
うずらの里児童館、中京青少年活動センター

午前は、まーくん（山領真広さん）・みさ（水田三咲さん）と一緒にふりかえりの時間を持ちました。企画立案からマップ配布までをふりかえり、印象深かったことや腹を立てたこと・感動したことなど、項目ごとに「ふりかえりシート」に記入。「大学生スタッフは僕らの考えを促すような、次につながる問いを投げかけてくれてた」「自分の意見を言うだけじゃなくて、相手の意見も尊重するように心がけた」など、活動の中ではなかなか聞けなかった言葉が語られました。

午後は、あかね（山岸茜衣さん）・もっちゃん（元生旭さん）・おぐ（小倉裕貴さん）・ひかる（丹羽光さん）4 人のふりかえりでした。「実はあまり意見が言えなくて…」「アンケートの 1 回目で勇気を出して聞けた」などの体験を皆で共有し合いました。相互にやりとりしていく中で「やわらかい考え方ができるようになりたい」「僕も児童館で年下の中高生のサポートがしたい」といった、今後につながる学びも見えてくる時間が持てました。

報告会

企画名　高校生対象シティズンシップ教育事業
ユース ACT プログラム 2010 活動報告会
目　的　高校生が取り組んできた企画内容や、感じたこと・気づいたことなどを「まちの大人」と分かち合うことを通じて、高校生の学びの意識化をすすめること。
日　時　2011 年 2 月 26 日（土）13：30 ～ 16：30
場　所　同志社大学今出川校地　博遠館 305 教室
参加者数：24 名

事前準備

短期・長期それぞれのコースに参加した高校生たちが会場に着いてすぐ始めたのは、発表前の念入りな最終打ち合わせとプレゼンテーションのためのポスターの手直し。報告会に来てくれる方たちに、面白く、そして分かりやすく伝える工夫を、限られた時間の中で一生懸命こらしているようでした。

企画発表「ともいきキャンプ」

緊張のし過ぎか、２人のテンションは高まり気味。始めはソワソワしていたものの、会場の暖かい雰囲気に安心したのか、人前に出ると落ち着いた口調で発表していました。しばらくすると、いつも通りの満面の笑顔で話せるようになり、キャンプのプログラムそのものから学んだことだけでなく、準備やキャンプ中に２人の間で起こったさまざまなことをとても楽しそうに伝える様子は、会場の参加者の誰をも引き込んでいたように思います。

企画発表「マツプ・デラックス」

長期実践コースの６人が考えたポスターは、彼ら / 彼女らオリジナルの「テンショングラフ」。企画立案からマップ配布までの皆のテンションが、大きなグラフで表されていました。「スクーリングの時にテンションが一度下がったけど、その後やるべきことが見えると上がった」という話や、「新聞の取材が来た時はやっぱりテンション上がりました！」という話を、６人で代わる代わる説明。また、四条河原町周辺で実際に配布したマップの入ったティッシュを会場でも配り、参加者に実物を見てもらう場面もありました。

パネルディスカッション

スタッフ側からの質問に対して、短期 / 長期それぞれのコースから代表の２名ずつが自分の回答を紙に書いて発表しました。「自分にとって一番大きかった気づきは？」「人に意見を伝える難しさですね」。そんなやりとりや、「参加してみて、あらためて気づいた自分の一面は？」との問いに「人見知りやと思ってたけど、案外すぐに話せるようになる」と答える場面もあり、彼ら／彼女ら自身の言葉で気づきが語られました。そんな高校生たちの姿を、会場全体が温かく見守っているようでした。

ミニ・グループセッション

高校生がペアを作り、それぞれ４つのグループに分かれたところへ参加者が混じり、高校生の生の声を聞ける時間でした。「正直、大学生スタッフがいなくても出来る！とか思わなかった？」という突っ込んだ質問にも、「思わなかった！このメンバーだからこそ出来たことだと思うし、じゃないとあきらめてた気がする」という高校生の回答に、参加者が興味深く聞き入る様子も見られました。3 回のグループ移動を経て報告会は終了しましたが、高校生からも参加者からも漏れていた「もっと聞いて欲しい」「もっと聞きたい！」という声が印象的でした。

参加者の感想

短期集中コース

今西優貴さん（京都外大西高等学校 3 年）

私は今回、初めてボランティア活動に参加しました。きっかけは、担任の先生を通じてクラスのホームルームにユース ACT プログラムの鈴木さんと湯浅さんが来られたことです。そのとき、取り組んだアクティビティは「今気になっているニュースは？」という質問に対する自分の考えをマジックで書くという単純なものだったけど、すごく新鮮でした。普段の高校の授業は「求められる答えも 1 つ」が当たり前だから、1 つのテーマについて色んな人の考えを知ることがすごく興味深く、大学生になる前に何か経験したいと思い参加しました。

キャンプを企画する立場となった私は、どうすれば参加者の人達に楽しんでもらえるかを考えながらアクティビティを組み立てました。キャンプ当日、1 日目は参加者の方と同じように戯れたりしてしまい、その日に感じたことを話し合う夜の反省会で、2 日目はもっと責任をもって行動しなければと感じました。キャンプを企画する立場になり、行事予定の時間配分や気配りの大切さがよくわかりました。全体を見て行動できるようになれば、もっとみんなに楽しんでもらえたかなと思いました。参加者の皆さんの協力もあって、すごく貴重な時間を過ごすことができました。

報告会では、緊張しすぎてあまり上手く話せなかったけど、真剣に聞いてくださる方がたくさんいて、嬉しかったです。個別で話を聞きに来てくださった方もいたので、大勢の時とは違っていろいろ話すことができました。人のために自分ができること、それを考えるきっかけを作ってくれたのがユース ACT プログラムでした。周りの人のことを知れるだけでなく、自分のことも知ることができたのではないかと感じました。3 ヶ月間の短い間でしたが、ありがとうございました。

浦上由紀さん（京都外大西高等学校 3 年）

私は、高校生スタッフとしてこの「ともいきキャンプ」に参加しました。最初は高校生スタッフというよりも、単に参加者としてやっていました。でも、スタッフミーティングや自分たちに仕事がまわって来た時に、スタッフとしての自覚が持てるようになりました。それまでは大学生や他のスタッフに任せきりにしていたので、もっと責任感を持って行動しなくてはならないと感じ、言われたことだけでも、自分たちでやろうと不器用ながらやっていくようにしました。高校生スタッフは 2 人しかいなかったので、お互いに良いものを作ろうとして、ケンカもしました。普段はあまり自分の意志を相手に伝えることはしませんが、ケンカした時に自分の意志をはっきり言うことは大切だと感じました。

キャンプでは、自分の責任感が足りないこと、周りを見て行動する力がないことに情けなく感じました。他のスタッフのフォローがなければ成功していなかったと思います。

今回、この活動を通して私が強く思ったことは、自分の意志をはっきりと相手に伝えること、責任を持ち、周りを見て行動することは、何事においても大切だということです。私は、「ともいきキャンプ」に参加して、本当に良かったと思っているし、感謝しています。ありがとうございました。

長期実践コース

小倉 裕貴さん（京都府立京都八幡高等学校 2 年）

このプログラムに参加してみて学んだことは、地域の課題を発見するだけでなく、その問題を改善するために自分が何を出来るのか考えることが大切だということ。考えたことを行動に移すことで、地域の問題の解決にも繋がるということ。そして何より、自分に絶対プラスになることだと思います。また改めて、相手に意見を伝える難しさを再確認しました。

印象的だったことは、アンケート調査と地図配りです。アンケート調査では、知らない人に声をかけてアンケートをしてもらうのはとても大変でした。恥ずかしくて勇気がいりましたが、やっていくうちに慣れてきて、最後の方は自分から積極的に声をかけに行くことができました。地図配りでは、配ったあとに「ありがとうございます」と言ってもらえて嬉しかったです。何より、地図を受け取ってすぐに地図を見ている姿も見ることができました。

自分自身が今後チャレンジしてみたいことは、ユース ACT プログラムの学生さんたちみたいに、児童館を通して、僕たちみたいな活動をしている小学生高学年や中学生のサポート側に立ってみたいです。高校 3 年生という大事な時期ですが、今まで通り児童館でボランティアをやっていきたいという気持ちもあります。将来の自分に絶対プラスになると思うので、高校を卒業しても児童館に通い、ボランティア活動や児童館の子どもたちと積極的に関わっていきたいです。

丹羽 光さん（京都府立桃山高等学校 2 年）

だいたい半年間くらいのユース ACT プログラムをやり終えて、最初の感想はまず「しんどかった」でした。学校の予定や部活、バイト等でみんなの都合がなかなか合う日がなくて、ミーティングをするのも大変でした。でも、いざミーティングとなると結論が出たときはとても気持ちが良く、これからどんな感じになるのだろうという期待もありました。

学校が違う人たちや、普段なら関わりを持つこともないだろう大学生とも交流できたのも楽しかったです。また、自分たちが内容を決めていくことができるので、結構やりたいようにできたと思いました。自分たちの意見やアイデアがそのまま反映されるので、おもしろかったです。考えがまとまらなくなった時は、大学生たちがアドバイスをくれたりするので、とても頼りになり、自分の考えが広がったと思います。他にも、自分たちで話を進めて行かないといけないので、自分から行動を起こせるようになったと思います。大変なことも多いけれど、その分やり遂げた感が強く、自分にプラスになる事も多かったので、参加してよかったです。

水田 三咲さん（京都市立日吉ヶ丘高等学校 2 年）

ふりかえりや感想といわれてもなかなか浮かんできません。でも、今回の企画を達成出来たのは、たくさんの人の助けがあって、ずっと一緒に企画をやってきた「なかま」がいたからだと思います。そう思うと、半年間一緒に悩んだり、止まったりして頑張って来れた「なかま」に感謝です。

この企画をするのにたくさんの方に関わってもらって、たくさん感謝しないといけないなぁと思いました。これから先、毎日を大切に、私に関わってくれる人に感謝しながら生きていきたいです。

山岸 茜衣さん（京都府立京都八幡高校 2 年）

ユース ACT プログラムには 2 年連続で参加させてもらって、人との関わりの大切さをあらためて感じた 2 年間になりました。高 1 の時に初めて参加すると決めたとき、続けていけるかどうかがとても不安でした。でも、去年の企画「ニシウラクエスト」も無事に終わり、参加者の方に「来年もしてな」「楽しかった」と言ってもらって、やって良かったと思いました。そして今年もユース ACT プログラムの話が入り、最初は部活やバイトなどがあり無理っていう方向だったけど「みんなで頑張ろ！」「するんだったら、去年した高校生 6 人でしょ！」とみんなで決めました。

大学生も入っての週 1 回のミーティングをして、スクーリングもして、なかなか決まらなくて「もう無理ちゃうん？」と思ったけど、なんとか成功して終わりました。高校生 6 人で無事に終わったことが今でも心の中に残っています。今年は京都新聞に載せてもらうこともでき、3 年になっても大人になっても自慢できるものになりました。その新聞を見たと言ってくれた方や、私たちが作ったものを活用してもらえているのを見て「本当にやってよかった」と心から思いました。本当に人と人とのふれあいや、人のあたたかさ、関わることの大切さを強く感じた 2 年間でした。3 年生になっても、またユース ACT プログラムをできたらいいと思うし、今まで感じたことを、学校生活などで活用したいと思います。

山領 真広さん（京都市立日吉ヶ丘高校 2 年）

2 年目となる今回の活動では、1 年目の反省を活かせたと思います。そして 1 年目より格段に個々が成長したと思います。1 年目はあまり発言できなかった人が積極的に発言したり、他人の意見や考えに対して自分の意見や考えを述べたりと、ミーティングへの姿勢が変わったと思います。個々が成長したことによって、チームとしての一体感が増したと思います。1 年目よりおもしろく、楽しく、個性が個性を引き上げるチームになり、時間を経る毎に、よりみんなのことを知れて、良いチームになりました。

自分自身、他人の意見を聞き入れることで、より深く考えることができ、1 つレベルが上の意見を述べられるようになりました、やってみて思ったことは「自分たちでもできる！変えられる！」ってことです。正直、自信がなかったんですが、実際やってみると「こんなにできるんだ！」って自分でもびっくりするぐらいの出来でした。高校生でも社会に影響を与えられるんだと身をもって感じました！今後、このような活動をする機会があれば、積極的に参加し、自分にもっと磨きをかけ、人間性を高めていきたいです。

元生 旭さん（京都市立日吉ヶ丘高等学校 2 年）

企画をつくっている段階ではいろいろと苦労もありましたが、企画を実施して、ふりかえりや報告会の準備を通して半年間を思い返したとき、確かな自分たちの進化を感じました。意見がぶつかることも去年はなかったけど、今年は何度かあったし、意見が出なくなって停滞することも今年は少なかったと思います。

去年よりスケールアップして、その分大変なこともあったけど、活動が新聞に載ったりして周囲の反応も大きかったです。街頭アンケートなど普通ではできないような経験をしたり、活動を通じて色んな大人の方に出会ってアドバイスなどをもらったことも「なるほど！」と思うことが多く刺激になりました。今回はその大人の方たち、大学生のスタッフ、そして自分たち高校生みんなで作り上げた感が強いです。ユース ACT プログラムの活動をしてから、こういう活動に興味を持つようになりました。大学生になってもしたいです。

スタッフの感想

事務局スタッフの声

井出葵唯（大谷大学文学部 3 年）

初め、関わり方やサポートの仕方が分からず、高校生メンバーとも最初はなかなか打ち解けられない時期もありました。けれど、彼らと共に活動や話を続けていくうちに、いつの間にか同じ空間にいるだけでワクワクするようになっていました。一緒になって悩んで、一緒になって喜んで。次はどんな案が出てくるんやろ？今なにを考えてるんやろ？　あっという間に終わったこのプログラムですが、もっともっと彼らの言葉や想いを聞いてみたい！と、振り返れば振り返るほど感じる思いがあります。

鵜川健（龍谷大学法学部 4 年）

私は高校生たちとミーティングをしていく中で、よくわからない問いかけをしてしまったり、場を混乱させてしまうことが何回かありました。その度にかなり落ち込むのですが、助けに入り、その後一緒に話し合ってくれる大学生メンバーや、それでも一緒に活動してくれ高校生たちがいました。おかげで最後まで投げ出さずに活動することができ、色々気づき、学ぶことができました。ありがとうございました。

蔵田翔（大谷大学文学部 3 年）

高校生と共に考え、共に学び合い過ごした半年間はとても充実した時間でした。彼らが発信した波によって、感化された人たちがまた新たな波を生みだしていく。そんな広がりが繋がっていけば嬉しく思います。

谷口優樹（同志社大学社会学部 2 年）

ACT に参加して 3 年目が経ちました。1 年目は、高校生として参加者し、2 年目と 3 年目は、サポーターとして参加してきました。途中、留学で抜けたりしましたが、3 年間やってきて本当によかったと思います。3 年間続けてこられたのは、周りの方々の支えがあったからだと思います。この 3 年間で色んな方と出会い、様々な経験をさせていただきました。私にとっては宝物です。この経験が決して無駄にならないように頑張っていきたいと思います。

松井康次（立命館大学政策科学部 2 年）

高校生の時は感受性が強い時期だと思います。このプログラムを通して、自分の高校時代と比べて、目の前にいる高校生がその一歩前に行っているなと感じました。そして、高校生にある一定の方向性へもっていく自分たちの立場がとても難しく感じたのと同時に、人を成長させるフィールドを作ることの大変さとやりがいを知りました。一緒にやっていたメンバーがみんな尊敬できるメンバーだったのも良かったです。ありがとうございました。

山口貴宜（大谷大学文学部 3 年）

自分の立ち位置にとても困惑しました。普段は高校生と一緒にあほなことも楽しんでできるのに、サポーターになると、どうしても企画メインで考えて高校生と接しなければいけないとか、しっかりしていなきゃいけないとか考えてしまって、動けなくなっていくんですよね。でも、高校生にはそんなことも見抜かれているようで、等身大で接しないと一緒には活動していけないんだと、高校生から学びました。やっぱり高校生はおもしろい。

湯浅雄偉（静岡県立大学国際関係学部 3 年）

「静岡でも ACT のように高校生たちの自発的な活動をサポートしたい！」という思いで大学を休学し、参画しました。最も印象的だったのは高校生との関わりです。それは彼ら / 彼女らの自発性・自律性と企画のクオリティーを天秤にかけて揺れてしまう自分や、大学生と高校生の不安・しんどさ・期待にどう向き合うのかなど、「わたしの関わり方」が常に問い返されるもので、新鮮でした。ここでの学びを活かし、しっかり静岡で活動します。

鈴木陵（ユース ACT プログラム事務局長）

「どうかかわったらよいのだろう…。」そう思いながら、どこかおそるおそる高校生と向き合っていた時間が私にもありました。企画が進むにつれ、徐々に互いの関係性が深まる過程で、高校生だけでなく大学生も、そして私自身も変化していったのだと実感します。

決して完璧でない人と人同士が、互いの肩書きや年齢を越えて影響し合い、補い合いながら前に進んでいく。そしてそんな経験を、やりっぱなしにせずふりかえり、「うまみ」をしっかり味わう。そんなぜいたくな時間が、このプログラムにはあったように思います。

共催児童館の声

谷口友美先生（うずらの里児童館 児童厚生員）

昨年度に続いて参加させていただきました。うずらの里児童館で活動している高校生も 2 年生になり、クラブやバイトで忙しい生活を送っていたので「今年も参加してみては」というお話を頂いた時も悩みながら参加を決めました。企画立案会ではどんどん話が大きくなり、「京都市に住みやすい町になってほしい」という企画になりましたが、何回も何回もミーティングを行い、高校生が思っているものが形になっていったと思います。

高校生にとっても、私にとっても初めてのことがたくさんありとても良い経験をさせていただいたのと、たくさんの方々に出会うことができました。また、何より高校生の成長を自分の目で見ることができてとても嬉しかったです。

実行委員会の声

委員長

深尾昌峰
（NPO 法人きょうと NPO センター常務理事・公益財団法人京都地域創造基金理事長・龍谷大学法学部准教授）

「やれない理由」を考えてあきらめるより、「やれる可能性」を追求していく姿勢に。その時に大切なのは、知識や経験不足をお互いに補い合う仲間の存在。みなさんもこのプログラムを通じて、学校生活だけでは得られない、一生つきあえる仲間を得てください。私もその一員に加われる事を楽しみにしています。

副委員長

川中大輔
（シチズンシップ共育企画代表）

「大変やったわぁ…」と多くの参加高校生が言います、少し晴れやかな表情で。報告会でその声を聴いて、そのさまに接して「よかったなぁ」と私は思っています。

ユース ACT プログラムは高校生を子ども扱いしません。手を抜きません。スクーリングでは、企画発表に対して、努力は認められつつも、グサッと刺さる問いかけが返されたことでしょう。みんな、本気で向き合っているからです。私たちはみな、高校生・大学生・大人という枠を越えて、張り合っているのです。

私たちは張り合う中で踏んばり、そして、自分の内なる力や関心に気づき、持てる力が発揮されます。これからも張り合っていきましょう。私は、私たちは、まちの人々は、みんなと共に社会をよりよいものへと変えていくことを楽しみにしています。

赤澤清孝
（NPO 法人ユースビジョン代表）

大学生の頃に言われたことで、印象に残っている言葉があります。「若い時の 1 年間は、おっちゃん、おばちゃんになってからの 1 年とは違うで。20 歳だと 1 年間は人生の 20 分の 1。50 歳だと 50 分の 1。また、仮に 80 歳まで生きるとすると、20 歳だと残り 60 年、50 歳だと残り 30 年。だから、若い時の 1 年は、その時の自分の生き方に与える影響も大きいし、その後の自分の生き方に与える影響も大きい。」と。今は、30 半ばになりましたが、本当にそうだなぁ、と実感します。みなさんは、まだ高校生。チャレンジすればするほど、自分に返ってくるリターンがたくさんあるはずです。未来の自分のために、ぜひ時間を投資しよう！

桐澤夏樹
（京都市福祉ボランティアセンター主事）

このプログラムに参加されたみんなが参加を自分で判断するだけでなく、グループで話し合い、そして社会課題と結びついていく、そんな様子を見ていると、高校生の時代は社会がどんどん広がる時代だと実感させられました。同時に、どんどん拡大する自分の社会に戸惑う時期かも知れません。

しかしその戸惑いにつぶされずにみんなの率直な思いを大切に、これからも地域社会にかかわっていってください。

野池雅人
（NPO 法人きょうと NPO センター事務局次長）

高校生の勇気と行動で、京都のまちをもっと元気にしたい！ユース ACT には、そんな想いをもった「おもろくて」「かっこいい」仲間達がたくさん集まってきます。普段の高校生活では味わえない新しい出来事、出会いを、あなたもこのプログラムで体験してみませんか。私も、この ACT をみなさんと一緒に盛り上げていきたいと思っています。

山口洋典
（同志社大学大学院総合政策科学研究科准教授）

「宿題をやれ」と「クイズの答えを考える」とでは、受け取る印象が違うと思います。宿題はやらされるもの、クイズは自ら解くもの、と違いがあるからでしょう。しかしユース ACT プログラムは、「問題を考える」あるいは「問いを疑う」中で答えを探す活動だったと思います。そうして導き出された答えは「唯一の正解」ではなく「求められる最適の考え」ではなかったでしょうか。

私たちには、よりよい未来のために社会を問い、いかに問いに「応え」ていくか、行動への主体性が問われています。ぜひ今後も、今回出会ったかけがえのない仲間たちとともに、まちに数多とあふれた問題をパズルのように解いていっていただけることを願っています。

監事

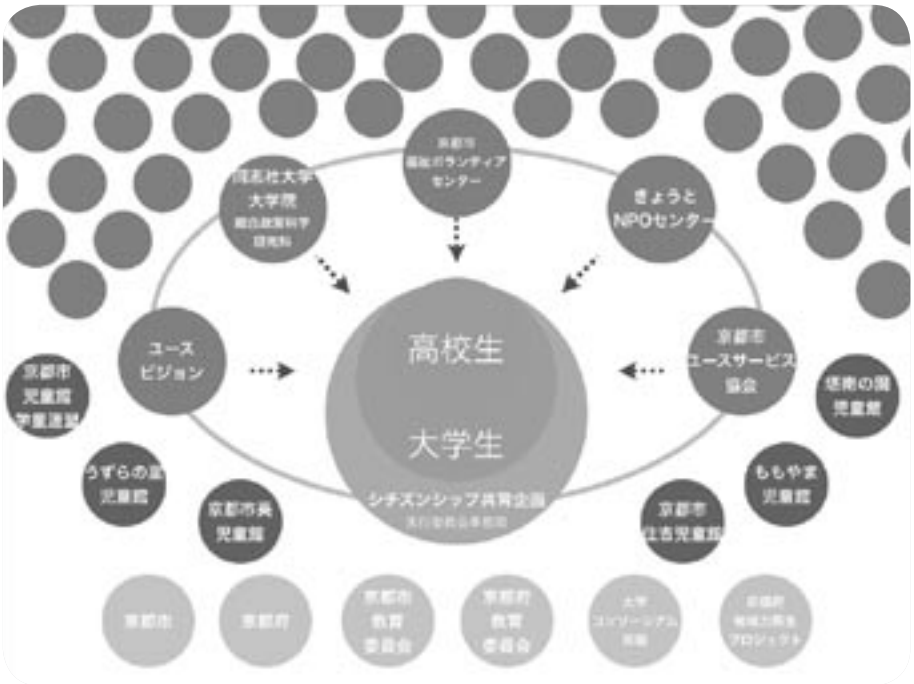
水野篤夫
（財団法人京都市ユースサービス協会事業部長）

先日、新聞の特集で、「学校の外に目を向けることが怖い」という高校生の意識が紹介されていました。皆と違うことをすることで周囲がどう受けとめるか心配だということだそうです。分かると思う反面、やはりもったいないと思います。高校生の時の経験はその時しかできないし、“自分でやったこと”は誰にも損なわれない宝だと思うのです。これは自分たちへのメッセージでもありますが・・・。

実施体制

本プログラムの実施にあたっては、実行委員会形式をとっています。NPO 法人きょうと NPO センター、NPO 法人ユースビジョン、京都市福祉ボランティアセンター、財団法人京都市ユースサービス協会、同志社大学大学院総合政策科学研究科、シチズンシップ共育企画からなる実行委員会を設立し、シチズンシップ共育企画に事務局を置きました。

市民活動支援、青少年支援、福祉、高等教育などの分野から京都のまちづくりに取り組んでいる団体が、これからの「まちの跡取り」である高校生や大学生を育成する視点から企画運営に取り組んでいます。また、各団体が関係する地域資源と高校生・大学生をコーディネートする役割も持っています。



共催　うずらの里児童館、京都市葵児童館、京都市住吉児童館、ももやま児童館、塔南の園児童館

後援　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、公益財団法人大学コンソーシアム京都

助成　京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金

実行委員を交えたスクーリングの様子

参加者アンケート

ユース ACT プログラムでは、本事業を通じて参加高校生にどのような変化がみられたのかを明らかとするため、事業終了後に参加者変容に関するアンケートを実施しました。以下に示すそれぞれの項目（※表 1）について、「参加前」と「参加後」の自分自身それぞれに 1（全く当てはまらない）～ 5（よく当てはなる）の 4 段階で答えてもらいました。さらに、それとは別に「社会と自分との距離感」に関する 1 項目（※表 2・3）についても同様に 1（近い）～ 4（遠い）の 4 段階で答えてもらいました（自由記述を含む）。
以下、その集計表を示し、結果の分析・考察を述べます。

■ コミュニケーションに関する考察

1. 私の考えを表に出せる、伝えられる
【長期】（2.3 → 3.5）【短期】（2.3 → 3.4）
2. 他人への関心を持ってコミュニケーションをとろうとする
【長期】（3.0 → 3.8）【短期】（2.8 → 3.8）

上記 2 項目については、短期、長期両コースの参加者ともに参加前の自己評価よりも高い値を示しました。特に項目 2 については長期実践コースに参加した 6 名のうち 5 名が「よく当てはまる」と答えていました（1 名のみ「当てはまる」に回答していますが、参加前の自分については「当てはまらない」と答えているため、プログラムを通じて変化があったと考えられます）。この変化は、元々幼なじみでもある 6 人が 2009 年度からの継続参加ということもあり、各自が言いたいことを言う段階から、メンバー同士の考えをすり合わせながら意見をまとめていく過程を経験し、合意形成の困難さを経験したためと推察できます。

■ グループ活動に関する考察

3. 私と異なる考えを持つ人を受け容れられる
【長期】(3.2 → 3.7)【短期】（3.5 → 4.0）
4. 人と協力し合って活動することができる
【長期】(3.3 → 3.5)【短期】（2.5 → 4.0）

この項目において特筆すべきは、短期集中コース参加者の回答がいずれの項目においても高い数値に変化していることです。これは、メンバーとの協働作業を進める中でつまづき、また「自分の意志が相手に伝わらない」もどかしさを経験しながら試行錯誤を重ねた結果であると考えられます。
また、長期実践コースの数値は微増にとどまっています。これは、本プログラムに参加する前から児童館で共に活動していたグループであったことが影響していると言えるでしょう。

■ 主体性に関する考察

5. 進んで自分の役割を見つけ、行動に移すことができる
【長期】（2.7 → 3.3）【短期】（2.0 → 3.0）
6. 興味のある社会的出来事を自分たちで調べる
【長期】（2.0 → 2.5）【短期】（3.0 → 3.5）
7. 何か問題が起こったときに、まず自分たちで解決しようとする
【長期】（2.3 → 2.8）【短期】（3.0 → 4.0）
8. あきらめず、やりぬき通す
【長期】（2.8 → 3.3）【短期】（2.5 → 4.0）

項目 5、7、8 について、特に短期集中コースの数値が高まっています。2 日間のキャンプ運営で「今、スタッフとして自分は何をすべきか」を先読みすることを求められる状況に直面する中で、指示通りに動くだけでなく、自ら判断し状況に対応していくことの必要性を実感していった様子が伺えます。
長期実践コースについては、フィールドワークやスクーリングを重ねる度に新たな事実や選択肢が浮かび上がり、その都度自分たちで決め、選び取ることを求められる環境にあったことが大きく影響していると言えます。

■ 社会性に関する考察

9. 地域の人や大人に協力を求められる
【長期】（3.0 → 3.2）【短期】（2.5 → 3.0）
10. ボランティア活動に興味・関心がある
【長期】（3.0 → 3.3）【短期】（3.0 → 4.0）
13. 私は人を信頼するほうである
【長期】（3.2 → 3.5）【短期】（3.0 → 3.0）

短期集中コースの項目 10 が参加前後を比べると大幅に伸びています。表 3 の回答で「ボランティア活動に初めて参加した」ことが読み取れますが、初めてのボランティア活動経験が社会性を身につけるにあたっての大きな変化を生み出すと言えるでしょう。また、今後もボランティア活動をはじめとする社会的な活動に携わっていく可能性を示唆しています。
一方、長期実践コースは他の項目に比べると微増に留まっています。これは、参加した 6 名が以前から児童館でボランティア活動に従事していたグループであり、地域の大人たちに囲まれるなどして社会性を養う経験を積む機会を得ていたからだと推察できます。

■ 自己肯定感・社会的有用感に関する考察

11. 私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかも知れない
【長期】（2.8 → 3.3）【短期】（3.0 → 3.0）
12. 私は価値のある人間だと思う
【長期】（2.8 → 2.8）【短期】（2.5 → 3.0）

項目 11 について、長期実践コース参加者の数値は上昇しているものの、短期集中コースについては変化がありません。これは、長期実践コースが自らの生活実感の中から取り組む課題を決めた一方、短期集中コースにおいては企画

の枠組みを大学生が準備したことで「私が変えてほしい社会現象」に焦点を当てる機会が不足していたためと考えられます。このことから、こうしたプログラムにおいては個々人の問題関心と向き合う機会が重要であることが確認されました。

なお、項目 12 において長期実践コース参加者の値が変化していません。本コースは短期集中コースに比べ、実行委員をはじめとする多様な大人との出会いの場が多くあります。こうした機会を通じて自己を相対化する多様な指標を得ることとなり、自己評価の適正化が図られたと推察できます。一方の短期集中コースの数値の伸びは、「ともいきキャンプ」を実施する中で受益者からの直接的なフィードバックを得られたことが大きな要因であると考えられます。

■ 自分と社会との距離感に関する考察

参加前後の自分と社会との距離感を表すといくつになりますか？

【長期】（3.3 → 2.1）【短期】（2.8 → 2.3）

※「社会との距離感」を 1（近い）～ 4（遠い）の 4 段階で回答してもらいました。

特に長期実践コースの参加者に大きな距離感の縮まりが見られました。参加者 b の自由記述欄の回答が「ただ社会に流されるだけ」から「今は少しでも変えれる気がする」へと変化していることや、ふりかえりの場面において「地元をよくする活動をしていきたい」という声が上がっていることなどから、自身が社会の一員であり、かつ担い手であるという意識の高まりが見て取れます。これはフィールドワークで違法駐輪の現状を自身の目で確認し、アンケート調査を通じて地域課題の現場に出かけ、当事者に直接働きかけたことが大きく影響しているでしょう。また、マップ配布時には道行く方に「新聞記事で取り組みを知ったよ」と声をかけてもらう場面もあり、「自分たちの問題意識や取り組みが他者に見られているのだ」という実感を得ることによって、距離感が縮まったものと考えられます。

さらに、長期実践コースの参加者の方が短期集中コースに比べて数値の変化が大きい点にも注目すべきでしょう。より「社会が身近なものである」という実感値を高めるには、自らの実感値の高いテーマから出発し、まちに出てみて、他者と協働しつつ試行錯誤を重ねる一定の期間が必要だと言えます。

表 1：参加者変容に関する調査（1）

No.	アンケート項目	長期実践コース	短期集中コース
		平均点（/4）	平均点（/4）
1	私の考えを表に出せる、伝えられる。	2.3 → 3.5	2.0 → 3.0
2	他人への関心を持ってコミュニケーションをとろうとする。	3.0 → 3.8	2.0 → 3.5
3	私と異なる考えを持つ人を受け容れられる。	3.2 → 3.7	3.5 → 4.0
4	人と協力し合って活動することができる。	3.3 → 3.5	2.5 → 4.0
5	進んで自分の役割を見つけ、行動に移すことができる。	2.7 → 3.3	2.0 → 3.0
6	興味のある社会的出来事を自分たちで調べる。	2.0 → 2.5	3.0 → 3.5
7	何か問題が起こったときに、まず自分たちで解決しようとする。	2.3 → 2.8	3.0 → 4.0
8	すぐあきらめず、やり抜き通す。	2.8 → 3.3	2.5 → 4.0
9	地域の人や大人に協力を求められる。	3.0 → 3.2	2.5 → 3.0
10	ボランティア活動に興味・関心がある。	3.0 → 3.3	3.0 → 4.0
11	私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない。	2.8 → 3.3	3.0 → 3.0
12	私は価値のある人間だと思う。	2.8 → 2.8	2.5 → 3.0
13	私は人を信頼するほうである。	3.2 → 3.5	3.0 → 3.0

表 2：参加者変容に関する調査（2）

アンケート項目	長期実践コース	短期集中コース
	平均点（/4）	平均点（/4）
自分との社会との距離感を 4 段階で表すといくつになりますか？	3.3 → 2.1	3.0 → 1.5

※「社会との距離感」を 1（近い）～ 4（遠い）の 4 段階で回答

表 3：参加者変容に関する調査（2）（自由記述欄）

	参加前	参加後
a	普通に過ごしていた。	社会の事を考えるようになった。
b	ただ社会に流されるだけ	今は少しでも変えれる気がする。
c	社会「は」あるものやと思ってた	社会「と」あるものやと思えた
d	社会とは全く関わることなくて、普通の生活を送っていた。	ユース ACT プログラムに参加して、駐輪場のことを考えていた。
e	社会に何かを訴えられる	社会の一員だという自覚はある
f	きょうみがない	やってもきょうみがない
g	まだボランティアに参加してないから。	責任感を持つことが大切だと気づき協力し始めたから。
h	ボランティア活動に参加していなかったので、知らないことがたくさんあったから	普段できなかったことが経験できたから。

課題と次年度の展望

2010 年度の課題

■高校生参加者の活動時期の設定

「短期集中コース」「長期実践コース」のいずれにおいても、企画実施期間が 1 月であることから高校生の試験期間と重なり活動時間の確保が困難な場合が見られました。高校生の学校生活のスケジュールに即した活動時期・期間の適正化を図るべきだと考えます。

■参加者人数の伸び悩み

参加者募集の段階において、市内の各種高等学校に訪問し高校教員の方々とのネットワーク形成が進んだものの、参加者獲得に結びついた割合はそう高くないものでした。志ある教員の方々とのネットワークを活かしたさらなる参加者獲得が望まれます。

2011 年度の展望

■長期実践コースへの一本化、実施時期の検討

高校生にとって、最も力が発揮されやすい長期休暇を活用するために、プログラムをスタートする時期を 8 月に前倒しし、また、活動期間についても適正化します。

■大学連携プログラムの企画検討を開始

進路が定まった高校 3 年生を対象として 2010 年度に増設した「短期集中コース」については自主開催せずに、大学連携プログラムを通じたアプローチを検討し、プログラムの枠組みを外部提供していくことに努めます。

■高校教員の方々との交流の場を設定

2010 年度の活動を通じて得られた高校教員の方々とのネットワークを活かし、相互理解を促進しながら本プログラムの企画実施における協力関係の強化に取り組みます。

■学生スタッフの研修機会の充実

高校生の活動を支援する大学生サポーターの間でのコンセプト共有を強化するため、研修機会を設けると同時に、共有資料の明確化にあたります。

■『ユース ACT プログラム・ワークブック（仮）』の作成に本格着手

「シティズンシップ教育」という言葉が首長の公約や「子ども・若者ビジョン」に盛り込まれるなど、日本においてもシティズンシップ教育に対する関心が高まりつつあります。そんな中、本プログラムの実践を通じて蓄積されたナレッジ／ノウハウを集約したワークブックの作成に本格的に着手し、社会発信に重点を置きます。

■特別コース「東日本大震災支援コース」の設置

2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災を受け、未曾有の大災害に対し「何かしたい」という思いを抱いている高校生も多くいると思われます。そこで、「京都地域からの被災地支援」をテーマとした特別コースを設置します。

収支

ユース ACT プログラム 2010　収支決算

収入の部	
1．事業収入	
参加費（短期集中コース）	2,000
参加費（長期実践コース）	9,000
参加費（ともいきキャンプ）	61,000
2．寄付収入	
活動報告会参加者より	15,500
3．負担金	
実行委員会参加団体より	177,718
4．助成金収入	
京都府地域力再生プロジェクト事業交付金	110,000
5．雑収入	
受取利息	1
収入合計	375,219

支出の部	
1．報償費	
報告書デザイン料	90,000
2．印刷・製本費	
報告書作成費	105,000
チラシ等印刷費	18,287
3．通信費	20,610
4．旅費・交通費	
宿泊費（ともいきキャンプ）	35,100
車両借上代	3,901
5．食費	20,550
6．保険費	4,335
7．消耗品費	
事務用品等	56,328
8．施設使用料	
会議室使用料	6,100
9．振込手数料	1,260
支出合計	361,471

当期収支差額	13,748
前期収支差額	▲ 13,748
次年度繰越金	0

マスコミ掲載

以下の新聞に掲載されました。

第3種郵便物認可

京都市伏見区のうずらの里児童館を拠点に活動している高校生6人が、同世代の若者の違法駐輪をなくそうと、市中心部の四条河原町周辺の駐輪場を示した地図を手作りした。市全域の駐輪場地図は市役所から発行されているものの、街頭アンケートをしたところあまり知られておらず、「高校生らしい、見やすい地図を作ろう」と考えた。11日に1000部を中学・高校生に配る予定にしている。

若者の〝違法〟なくしたい

駐輪場マップ 四条河原町周辺 高校生手作り

高校生が手作りした駐輪場マップ。配布当日に向け、1枚ずつティッシュの袋に入れている（京都市伏見区・うずらの里児童館）

小型版、使いやすく

5ヵ所の場所や利用料など表示

6人は、同児童館で年少の利用者の遊び相手やイベントの企画などをしているメンバー。高校生がまちの課題に気づいて解決に動く「ユースACTプログラム」の一環で、昨年9月から駐輪場地図の作製に取りかかった。

地図はB5判で、河原町通（三条―四条）と新京極通の周辺にある公営と民営の駐輪場5カ所を手書きで示した。それぞれの電話番号と駐輪できる台数、利用料も書き入れた。

市内全域の駐輪場地図は、市が発行している品が以前からあるが、6人が昨年12月に河原町通周辺で中学・高校生にアンケートをしたところ、地図の存在を知る人は74人中5人にとどまった。また、市の地図はB2判で、折りたためばポケットサイズになるものの、6人は「大きく、網羅的すぎて使いづらい」と感じたという。

メンバーの日吉ケ丘高2年元生旭君（17）は「中学・高校生のなかには、駐輪場が分からなくて違法駐輪する人も多い。場所が分かれば違法駐輪も減るんじゃないか」と話す。京都八幡高2年山岸茜衣さん（17）は「一人でも多くの生徒に地図を見てもらい、道端に自転車をとめるようなことがなくなってほしい」と期待している。

地図に掲載した繁華街で11日昼ごろ、ティッシュと一緒に配ることにしている。

（松田ゆい）

「若者の“違法”なくしたい／駐輪場マップ　四条河原町周辺　高校生手作り」
京都新聞　2011年2月9日付

広報資料

右・下：
長期実践コースプレ・プログラムチラシ

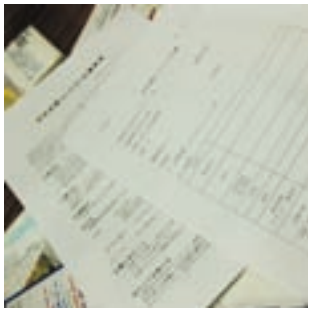
左・上：
長期実践コースチラシ

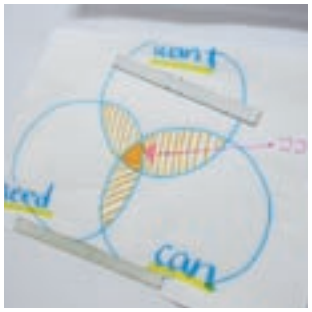
上：
短期集中コース
「ともいきキャンプ」チラシ

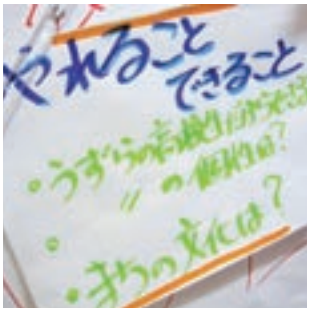
下：
短期集中コース
「スクール・オブ・チェンジ」チラシ

下・左下：
ユース ACT プログラム 2010
活動報告会チラシ

このページ全て：短期集中コースチラシ







ユースACTプログラム 2010年度 報告書

ユースACTプログラム実行委員会　発行：2011 年 3 月
本報告書は京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金の助成を受けて発行されました